
魔法少女リリカルなのは ～奈落の兄弟～

キール

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは ～奈落の兄弟～

【Nコード】

N1748Y

【作者名】

キール

【あらすじ】

鉄面皮な騎士。皮肉屋な魔法使い。等様々な、キールが生んだオリキャラを加えてのなのはです。至らぬ点があると思いますが宜しくお願いします。

奈落の騎士（前書き）

魔法の出る作品って好きなのでこちらにも挑戦してみました。 完結
できるように頑張ります。

奈落の騎士

暗い深淵が世界を包んだ。

光は無く、そこにはあるのはひとりの少女。ああ、これは夢なんだ。そう、時折見る夢

彼女はそう悟った。

少女の周りには、蠢く闇。意思を持つかのように彼女を取り囲む少女はその闇にたゆたう。その空虚な眼差しには何も映していないのが分かった。

ぽつ、と。光が灯った。その光は、闇へ、少女へと、向かう、弱い光。

まるで、月蝕の様に、光は浸食する。徐々に、徐々に。そして、闇が消えた。

否、彼女は気づいた。闇は、消えて無い。

顔を上げた、次は左右順に見渡して、そこにあるものを悟った。意思を持ったような闇

が、光を包んでいる。そして、その闇が意思を持ったような動きで全てを包む。光も、少女も、全てが消えた。

その中に、彼女は見た。

闇の中で、不気味な発光している、悪魔の様な金色の瞳が輝いているのを。

「騎士シーリア・ペイルティン。入室の許可を」

「許可します。お入りなさい、騎士シーリア」

扉を開いて、シージアは入室した。

二人の女性が彼を迎える。机上で手を揉みほぐしているカリムは、シージアを見る。年

端もいかない少年に似つかわしくない鉄面皮、それを下げてる少年は確か十を過ぎてまだそれほどでたつて経つてはいない筈だ。

つい知らずに苦笑を浮かべる。このうら若き騎士の顔が崩れる所を、彼女は見たことが

無い。彼が来て間もない頃に教育係をしていたシャツハや、共に教育を受けていたロツサ

でさえ、彼のこの表情以外の顔を見たことが無い。

やはり少年は表情を変えず、頭を下げる。

「騎士シージア、呼びかけに参上に馳せ参じました。カリム卿。騎士シャツハ。御機嫌よう」

背後で突つ立っていたシャツハは形式ばったその挨拶に、こちらも礼儀よく頭を垂れる。

「御機嫌よう、騎士シージア。お変わりない様ですね」

カリムはそんな堅苦しい二人と別にやんわりと言う。

「楽にしてください、シージア。あなたと私は友達でしょう」

それとも、私とあなたは友達ではないのですか、と言いかけたが、カリムはその言葉を

呑み込んだ。この少年はそうですと言いそうだからだ。

シージア・ペイルティンは決して美男子ではないが、いつも注目

の的になつていた。

珍しい伸びた黒髪に、金色の瞳。そして、二つ名『奈落の騎士』。

この奈落の騎士は絶対に崩れない姿勢と、規律に忠実な鉄の精神を幼いその身に秘めて

いた。その教祖じみた性質はシャツハの教育によるものなのか、と思つていたが、彼女の

言うには、彼はもともとそうだという事だ。本当かどうか疑わしいが。

彼の聖服の黒色は良く見るとびろろの黒 彼の好みの色だ。

その色は陽光を帯び艶

らかな色を出している。彼はこれが似合いすぎていた。彼の心を体現してるかのような

全てを覆い隠しているかのような漆黒が、彼の金色の瞳を映えさせていることも含め。

金色の眼光が彼女を射抜く。慣れてはいる筈だったが、この身体が慣れてしまうのだけ

は拒めない。シャツハも、優れた騎士である彼女でさえ彼の眼を見ない様になっている。

シーリアはそれを悟つたように、目を瞑つた。

「それで、カリム。君が俺を呼ぶと言う事は何か困り事かな？ 誓

いにかけて 俺は君の助けになるよ」

彼本来のその柔らかかな声。それを聞いて、鎧の様に纏っていた緊

張を解く。氷の仮面の

下に隠された、封印された感情の漏れだ。

カリムは微笑む。

「頼もしいお言葉ありがとうシーリア。お願いと言うのは」

そこで、少しためらいがちにカリムは間を置いて

「貴方に行つて欲しい世界があります。そこからロストロギアの反応があつたと連絡が来ました。すでに管理局には連絡はしていますが、まだ動けません。確たる証がないのです。そこで、貴方に先行して貰いたいのです。杞憂で終わればよいのですが」

「その管理外世界は『地球』と言います。情報はあまりありませんが、貴方なら、もし本当にロストロギアがあつたとしても大丈夫でしょう」

とシャツハ。シージアは騎士として 己の忠誠を捧げたものへ向ける、その歴然とした 態度で、優雅に答えた。そこに、先ほどまであつた暖かみは無かつた。カリムは思

い出した、彼は騎士だ。それとも一つの彼の、忌み名を。

『^{マグスベイン}魔導師殺し』。影で囁かれる、その名は何とも無い皮肉に聞こえた。シージアの瞼が開いた。金色の瞳が見える。

「カリム卿。よろしければこの騎士めに、その役目を担わせてはくれないでしょうか
奈落の名と聖王の名にかけて」

死地へ赴く騎士への祈りを、カリムはこの騎士へ与えようと、立ち上がった。シャツハもシージアへと向き直る。

「聖王の名にかけて 私達は奈落の騎士の無事を祈ります。行ってらっしゃい、騎士シーリア」

シーリアは二人を一瞥して、部屋から退室する。去り際に彼は立ち止り、言い残した。

「貴女が約束を違えることが無い限り、私はいつまでも貴女の剣であり、貴女の盾です。貴女が望む限りの事を私はこの身を以って叶えましょう」

そして、今度こそシーリアは退室した。暫しの間、彼が出て行った扉を見つめる。今にも彼がもどってくるような気がした。

去り際の彼の声が、カリムの耳元に囁く。まるで彼が直接語りかけてくるかのように。

あの、無感情な声音が語る。

「貴女が約束を違えたその時、私は貴女を貫く矛と変わりました。それをゆめゆめ忘れずに」

『試練の滝』ここがそう呼ばれ、幾星霜か。呼んだのは彼だ。ただ適当に見つけ、丁度良いからという理由だ。

ウーティスは、滝の流れをそっと眺めていた。激しい水の落ちる轟音が振動となりウー

ティスの小さな体を揺らす。

小さな石に腰をおろして体を休める。『魔導師の杖』として呼ばれる杖型デバイスに身を預けるような姿勢で、顔にはフードを目深にかぶっている。時折、苦しそくに空気を求めている。

不意に、滝の音が止む。

ウーティスはゆったりとした動作で立ち上がる。漆黒のローブが滑らかな波を打ち、わずかな衣擦れの音を出しながら、彼は滝へ向かった。見る人は彼を亡霊か死神の様だと言い、気味悪がる。彼は冷たい笑みを浮かべた。あながち間違っただけでも無い。

そこにはもう滝は無くなっていた。水も最早流れていない。まるで爆撃後の様な、その光景にウーティスはほくそ笑んだ。

滝壺だったその場所には、少女がいた。流れるような金髪、ウーティスの纏う漆黒に似た黒衣と黒いマントも、風に吹かれている。バチバチと電気が彼女の体に波の様に揺れている。

彼女を見、ウーティスは満足の笑みを浮かべた。だが、その笑みはどこか皮肉気で、嘲る様だった。その声も同じだ。

「完成だ」

彼女をローブの奥から覗くその眼には、くたびれた金色の光がこもっていた。

奈落の騎士（後書き）

こちらの金色の眼も、特に何の能力があるとかはありません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1748y/>

魔法少女リリカルなのは ~ 奈落の兄弟 ~

2011年11月12日07時19分発行